神戸市立小磯記念美術館

特別展「働く人びと 働くってなんだ？ 日本戦後／現代の人間主義（ヒューマニズム）」

2023年10月7日（土）～12月17日（日）

芸術だより

神戸市立小磯記念美術館
学芸員 多田羅 珠希

小磯記念美術館がある六甲アイランドとJR住吉駅を結ぶ六甲ライナーには、毎年七夕が近づくと、子供たちの願いごとを書いた短冊が貼り出されます。サッカー選手になりたい、お医者さんになりたい、思い思いの夢が、通勤時間を和ませてくれます。いま、短冊を眺める私たちは、幼いころの夢をかなえているでしょうか。

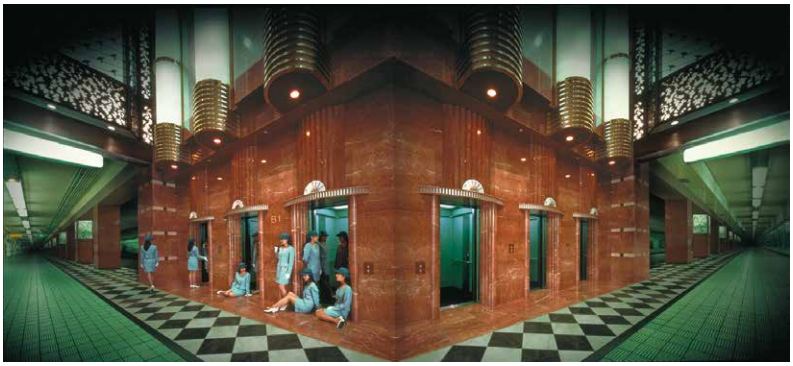
「将来の夢」が自分で選べる（少なくともその希望を持てる）ようになったのは、最近のことです。美術の世界では、本格的に「働く人」が作品の主題として認められた19世紀以降、各時代を反映した多彩な「働く人」が描かれるようになりました。小磯記念美術館で10月７日より開催する特別展では、終戦から現代の「働く人」の姿を表現した作品を紹介しています。

小磯良平が1953年に発表した《働く人びと》は、稲束を抱える人、漁を終えた人、煉瓦を積む人らが、横４mを超える大きな画面に構成されています。女性たちが身にまとう古代ギリシア風の衣装からは、人間の営みの普遍性と働くことの尊さが感じられます。この作品は、神戸銀行（当時）の壁面を飾るために描かれました。いまだ戦争の傷癒えぬ神戸の街で、銀行を訪れる人びとの将来を励ますかのような、希望の感じられる作品です。

時代に要請されて生まれ、消えていった職業もあります。やなぎみわの《案内嬢の部屋 B1》は、百貨店で働くエレベーターガールが題材となっています。一様の制服を身にまとった彼女たちは、美しくも、儚くもあります。過度に洗練された都会生活を彩るかのように、かつて彼女たちは存在していたのです。

展覧会では、農業、漁業、鉄道、建設業などさまざまな職業に従事する人、そして現代のビジネスパーソンまで、多彩な「働く人」作品約120点を展示します（素描を含む）。各作品に通底する人間主義（ヒューマニズム）を感じていただきたく思います。

小磯良平《働く人びと》1953年
油彩・キャンバス 神戸市立小磯記念美術館寄託



やなぎみわ《案内嬢の部屋 B1》1997年
ダイレクトプリント 大阪中之島美術館

※この特別展はみなと銀行文化振興財団が助成しています。